

子どもの表現活動を育む即興演奏の方法について (第2報)

— 絵本を使用する技術論 —

吉田 文

Zu den Möglichkeiten der Förderung frühkindlicher Ausdrucksfähigkeit mittels Improvisation, zweiter Teil: Vorschläge, ein Bilderbuch als grafische Notation für Improvisationsvorlagen umzuwandeln

Aya YOSHIDA

抄 録

日本の保育者にはピアノ演奏技術が必須とされ、保育現場でもピアノや鍵盤楽器が多く使われている。本論では、従来のピアノの演奏方法・使用目的の枠を超えた、応用性の高い即興演奏方法の一手法を研究した。即興演奏へのアプローチは多々あるが、今回は絵本の絵をモチーフとし、グラフィックな楽譜に変換する方法を検証した。実際の現場での検証は行っていないが客観的な指標は提示できないが、反復練習を必要とせず、演奏に正確さを求められない方法は、ピアノを不得手と感じる保育者に対しても、保育へ楽器を取り入れることへの敷居を低くすることができると思う。また、抽象的な響きとなる即興演奏を保育へ取り入れることは、子どもたちにも現代音楽にも通じる新しい響きの世界を開くとともに、自由な想像力と豊かな感性を養い、創造性を培うことができると思う。

キーワード：即興演奏, ピアノ表現, 絵本

1. はじめに

本論は、名古屋女子大学紀要第63号(平成29年3月)に寄稿した「子どもの表現活動を育む即興演奏の方法について—保育内容「表現」との関連性から—」、及び名古屋女子大学文学部編「シリーズ教育・保育の論点 理論と実践」で執筆した「絵本を使用したピアノ即興演奏の基礎的手法」(三恵社、令和2年8月)の内容を継承し、考察を深めていくものである。

「子どもの表現活動を育む即興演奏の方法について—保育内容「表現」との関連性から—」では、白鍵のうちの2音や4音といった限られた音を素材として使用する即興演奏の方法について検証をした。「絵本を使用したピアノ即興演奏の基礎的手法」では、黒鍵を使用し、太鼓や木、生き物たちの「笑い」をトレモロ奏法という一つの技術を多様に変化させることで、様々な質感、量感、動きなどを表現できることを提案した。

両論においては、保育現場でピアノが不得手な保育者でも練習や準備をせずに有効にピアノや鍵盤楽器を活用する方法を提示することが、研究の大きな動機である。養成校では必然と反

復練習を必要とする楽曲を授業内で扱うことから、学生にとってピアノとは「練習をしなければ弾けない楽器」という概念が固定化している。しかし、ピアノを「音を発する身近な楽器」として柔軟に活用できれば、保育者のツールの幅も広がり、何よりも子どもたちには音に対しての豊かな感性と柔軟な想像力が養われる。

その為、高度な楽曲演奏の技術を必要としなくても即興演奏を行う方法として、両論ではミニマル・必要最低限な要素のみを使うことを推奨した。

本稿では、これまでの「音楽的な要素の変化を通じた即興演奏の方法」を踏まえた上で、新しいステップとして、絵本の絵を図形的な楽譜に見立てて即興演奏をする方法を提示したい。

2. 新しい記譜法

(1) 記譜法の種類

1950年ごろより従来の奏法とは異なる楽器の使い方や、音楽表現の方法が模索される中で、様々な記譜法が生み出されてきた。エルハルド・カルコシュカ¹は1966年の時点で「新しい音楽の記譜法」を以下の様にまとめている。(Karkoschka, p.5)

- A. 伝統的な音符を変化させたもの
 - 1. 簡易化したもの
 - 2. 拡大したもの、補うもの
- B. 部分的に新しく構築されたもの
 - 1. おおよその音価を示す記譜法
 - 2. アクション (行動) を示すもの
 - 3. 音高・長さなどの特質を表す記譜法
- C. 完全に新しく構築されたもの
 - 1. 音律を示す記譜法
 - 2. 言語化されたスコア
 - 3. 音楽的な図形
 - a) 通常通りに音の高低や時間軸を読み取れるもの
 - b) 全く自由に読み取れるもの
- D. 電子音楽の記譜法
 - 1. 伝統的な記譜法を基として新しい記号を使用したもの
 - 2. 概要の草稿
 - 3. 言語で指定
 - 4. ダイアグラムが記録された穿孔テープに言語で演奏法が指定されたもの

1965年以降にも当然その他の新しい記譜法が多々開発されてきているが、本稿ではC.3.に相当する「音楽的な図形」について考察を進めるため、「音楽的な図形」が1965年の時点で「新しい記譜法」として認識されていた事実を記載するに留めておく。

(2) 「音楽的な図形」

カルコシュカに拠れば「可能な限り厳密な指図とは反対に、音楽的な図形は（訳者注：演奏内容を）固定することなく提案する²」（Karkoschka, p.79）と定義されている。

今回は保育現場でできるだけ身近に即興演奏を取り入れていける可能性について考察するにあたり、

- ・初心者や鍵盤楽器の演奏を不得手とする保育者でも演奏できること
- ・入念な練習や準備、読譜を必要としないこと

の点を念頭に置いた。厳密な演奏結果が指定されず、明確な答えがなく、偶発的な結果も許容、さらには推奨される「音楽的な図形」によって表されるような作品の表現方法について提示することは、本論の目的にかなっていると考えます。

3. 具体例

（1）絵本の抽出

絵本を楽譜として見立てる上で重要なことは、できるだけシンプルで、図形として見立てやすい絵が描かれていることと考える。その様な観点から様々な絵本を選出しているなかで、0、1、2歳児向けの比較的文章が少なく、輪郭や色彩がはっきりしている絵本が適しているという結果に至り、本論では、「いしげまりこ ぶん わきさかかつじ え 『どのはな いちばんすきな はな』」（福音館書店発行）を研究対象として抽出した。

（2）「絵本」から「図形」、そして「楽譜」への変換方法

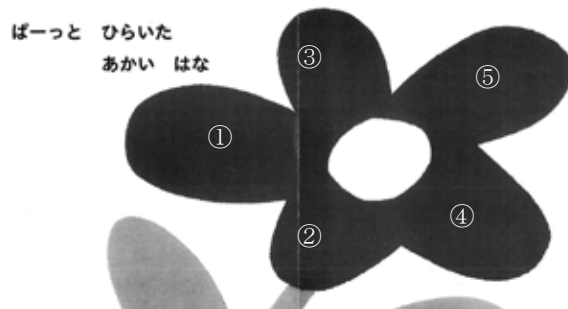
本論では、先行研究「絵本を使用したピアノ即興演奏の基礎的手法」（2020）でも提唱した「黒鍵のみを使用する即興演奏」の方法を継承する。鍵盤楽器の黒鍵は五音階から成り立っており、どの音同士を組み合わせても濁ることがないため、内的聴覚がない為を選択した鍵盤がどのような響きとなることが想像できない奏者でも、「間違ふことなく」音を組み合わせることができる。

基本的に、絵本の絵も従来の音符の様に、左から右へ読むものとする。音の高さも、下方に描かれているものは低く、上方に描かれているものは高いものとする。

また、花を描写するオノマトペも、演奏表現に反映することで細やかなニュアンスを表現することができるだろう。

1) ぱーっと ひらいた あかい はな

図1



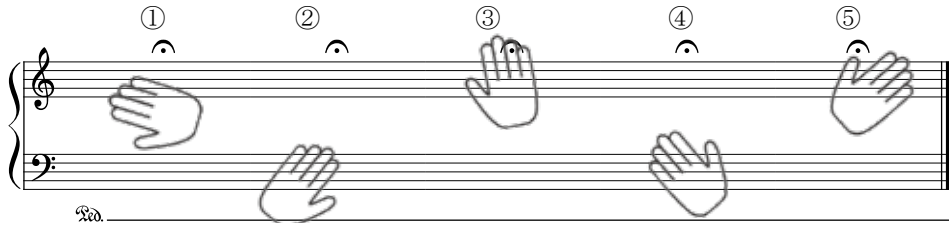
絵本から楽譜への変換方法は、一概に規則づけることはできないため、それぞれの例に説明を記載してある。実音で記譜してある例もあるが、音の高さや長さはおおよその目安としての提案でしかない。演奏者の感性や解釈、その場の雰囲気などによって変化して差し支えなく、むしろ演奏者がこれらの提案を元に自由な表現を自分自身で見いだすことが重要だと考える。

図1「ぱーっと ひらいた あかい はな」では5枚の花弁から成り立つ大きな一つの花が描かれている。花弁一枚を手のひら一つで押すアクションとして考えてみると、①～⑤の様な順序で鍵盤を押さえることができる。実際は、②と③や、④と⑤の順序が逆になっても構わない。

①は比較的中音部の音域となり、②と④は低音部で、③と⑤は高音部で演奏することができる。一つの花を表すので、まとまり感を表現するためにペダルを使用し、5つの音の塊りが一つの響きとなるようにする。見開き全体を使って一つの花が描写されているほど大きめの花なので、テンポはゆったりめが良い。

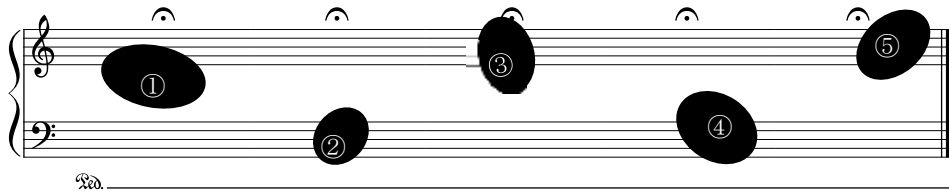
以下に花弁の形と手の配置の関係を表す。

譜例1

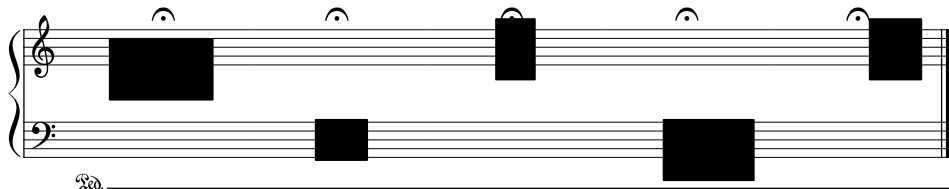


楽譜として記譜してみると、一例として以下の様に表すことができるだろう。5つの音符群を様々な大きさや角度で記したのは、花弁の大きさや角度をおおまかに楽譜上でも反映させたからである。音楽的表現としては、譜例3と何ら変わらないが、花弁の丸いニュアンスを演奏者が汲み取って演奏するには、譜例2の方がより判りやすいものとする。

譜例2

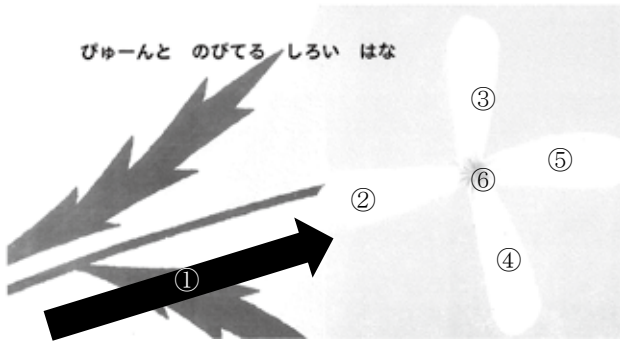


譜例3



2) ぴゅーんと のびてる しろい はな

図2



次ページの「ぴゅーんと のびてる しろい はな」では、「ぴゅーんと」というオノマトペから速さや勢いを読み取ることができるため、「ぴゅーんと」伸びている茎の部分で低音部から高音部へかけての速めのグリッサンドで演奏してみることとする（矢印①）。

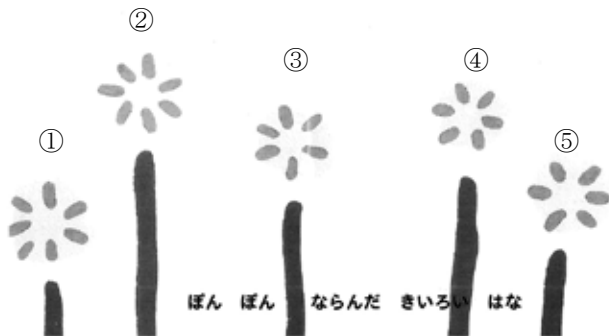
その後、細めの4枚の花弁は二音程のクラスターを高音部で4回弾き(②～⑤)、柔らかなタッチで描かれているめしべ・おしべの部分にあたる中心部は、緩やかなトリル(⑥)で優しい表現ができると考える。

譜例4

譜例5

3) ぼん ぼん ならんだ きいろい はな

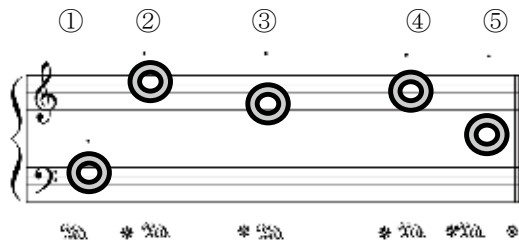
図3



「ぼん ぼん ならんだ きいろい はな」では、丸い「ぼん」のオノマトペで表される花が並んでいる。「ぼん」という言葉からは、丸い立体感と、ふっくらとした質感が感じ取れるが、これらは3つ程の鍵盤をペダルを踏みながらスタッカート奏法で演奏することにより、ある程度のまとまりでありながら「ぼん」という言葉に表される軽やかな丸みも表現できるだろう。また、花が並んでいる様子を五線譜に当てはめてみると、高低間の関係や次の音との間隔が視覚化される。

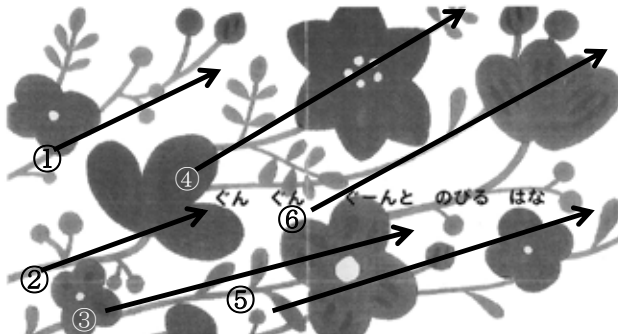
譜例6で使用した丸い記号は、指3本程度もしくは隣り合った黒鍵3つ程を同時に柔らかく、軽く演奏することを示している。

譜例6



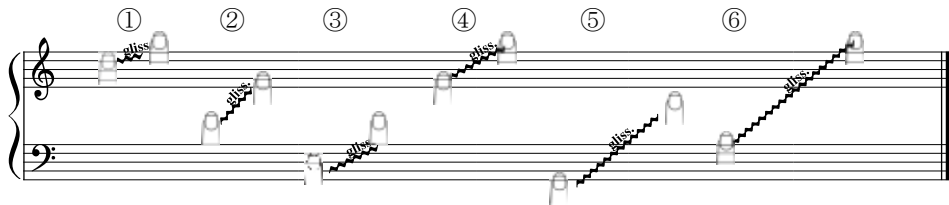
4) ぐん ぐん ぐーんと のびる はな

図4

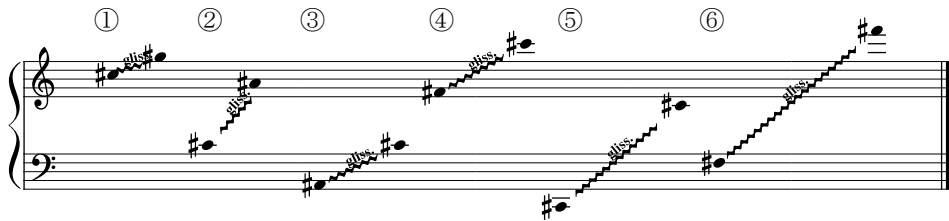


続く「ぐん ぐん ぐーんと のびる はな」では、左下から右上に向かって伸びる蔓状の茎といくつもの大小の花が描かれる。勢いの良さは、低音部から高音部へ向かって比較的早い速度で演奏されるグリッサンドで表現することができる。茎は比較的細いと考えられるため、指先を使用した一音ずつのグリッサンドが適していると考ええる。

譜例7

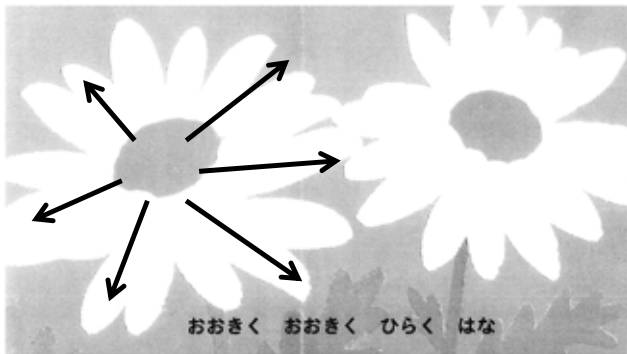


譜例87



5) おおきく おおきく ひらく はな

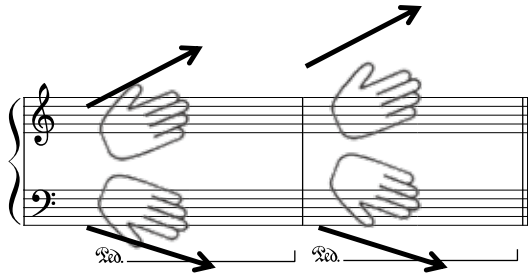
図5



「おおきく おおきく ひらく はな」のページでは、2つの白く大きな花が描かれている。「大きい」描写は、音楽では緩やかな動きで表すことができる。また、「花が開く」という動きは中心につぼんでいたものが上下左右に動くことで表現できると考える。

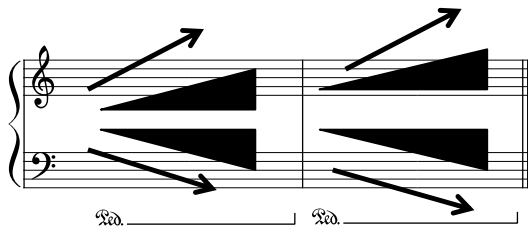
従って、この場合は狭い音域から徐々に、緩やかに広い音域へと移行する動きで、「おおきく ひらく はな」を鍵盤で表現できるだろう。この際に手のひら全体を使い、手首から指先へかけて徐々に重心を移行させることで、「花が開く」様子を演奏上の動作によって示すこともできる。

譜例9



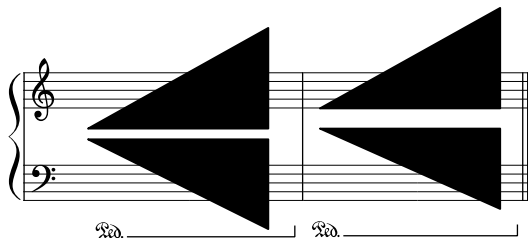
2回繰り返すことで「2つの」花を描写できるだろう。

譜例10



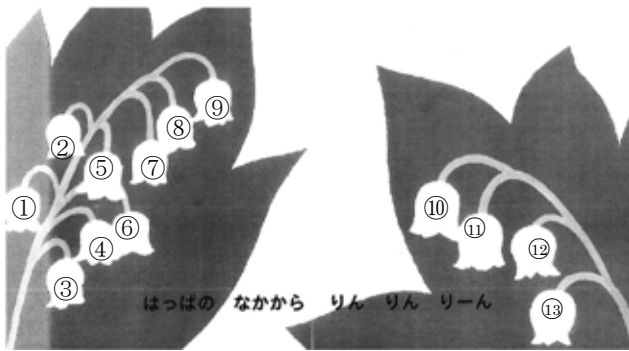
また、「類いなく大きな花」を描写する方法として、腕全体を使うこともできる。この場合は左右の指先で最初の音を弾き、徐々に腕の関節まで重心をかけていくことで、より広範囲に渡ったクラスターを演奏することができる。

譜例11



6) はっぱの なかから りん りん リーン

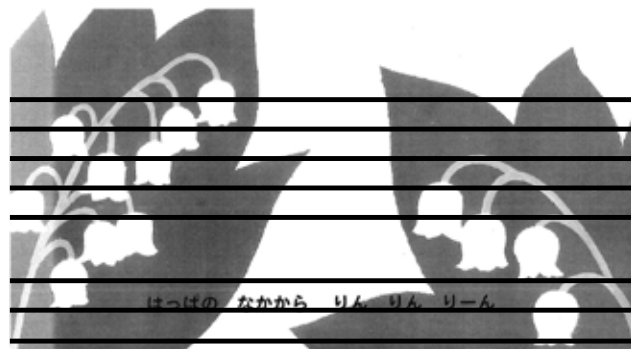
図6



続いて幾つもの小さな白い花が茎に連なる鈴蘭のような花が「りん りん リーン」というオノトマベと共に描かれる。

小さな量感は高音部で示すことができる。また、この花の場合は、花が丁度上下左右に並んでいることから、五線譜を当てはめた状態の様に、花一つを音符一つとして捉えることができる。

図7



譜例12

① ②③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬

Musical notation for Example 12. It consists of two staves: a treble clef staff on top and a bass clef staff on the bottom. Above the treble staff, there are 13 numbered circles (① through ⑬) corresponding to the notes. A dotted line with the number '8' at both ends spans from the first note to the eighth note. The notes are: treble staff (F#, G, A, B, C, D, E, F#) and bass staff (F#, G, A, B, C, D, E, F#).

8-----8

7) ふんわり そよそよ そよぐ はな

図8

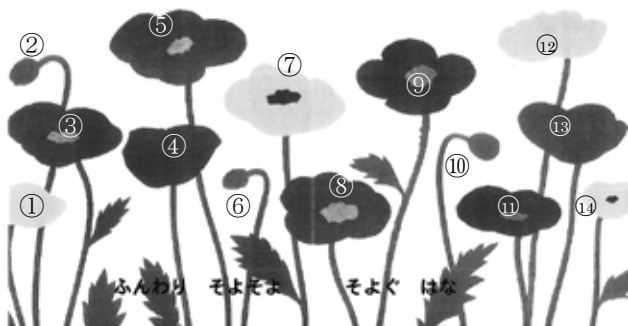
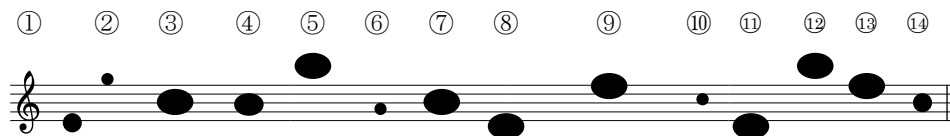


図6の花一つが一つの音で表されるとすれば、こちらの例はやや大きめの花が描写されているため、花一つを幾つかの音が塊となった音として描写することができるだろう。

「ふんわり」とした質感の花が「そよそよ」と優しく風に揺られて動いている様子は、一つの方法として、メゾピアノ辺りの音の強さの3つほどの音列によって演奏することができると提案したい。また、つぼみや小さめの花も描かれているため、三つの音列ではなくつぼみなら一つ、小さめの花なら二つの音を同時に鳴らすことで、異なった質感を表現できるのではないだろうか。

譜例13



また、「ふんわり そよそよ」というリズム感のあるオノマトペを表現するには、一定のリズムモチーフを設定して演奏することも考えられる。譜例14では①から③の花の並んでいる形と大きさの関係を一小節のモチーフとして作ってみた。このモチーフと交互にそれぞれの花の大きさや高さに応じた箇所の鍵盤を演奏することで、風になびいている様子の描写が可能となる。

譜例14

8) ぼっ ぼっ ぼっ あめと いっしょに ひらく はな
 図9

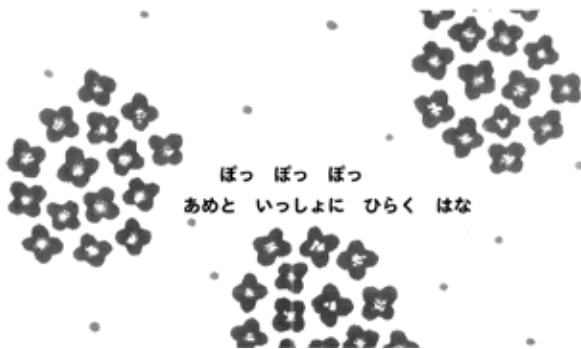
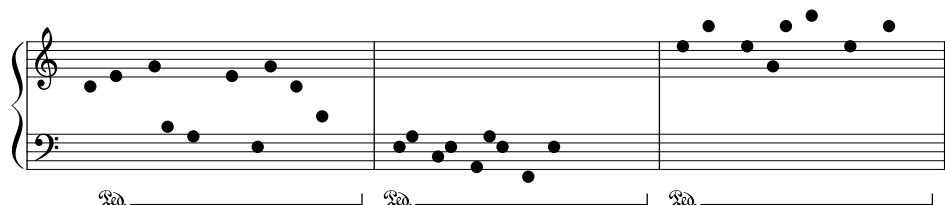


図9では、小さな花がいくつも集まって一つの花となる、あじさいを想起させる花が提示されている。「ぼっ ぼっ ぼっ」は雨の音なのだろうか、それとも花たちが開く音なのだろうか。読み手のイメージに託されているオノマトペであるが、促音が使われ、なおかつその間にスペースが挿入されていることから、「ぼっ ぼっ ぼっ」の言葉が速いテンポで読まれたり感じられたりするものではなく、比較的ゆったりとした言葉の間合いの感覚を楽しめるものと解釈する。

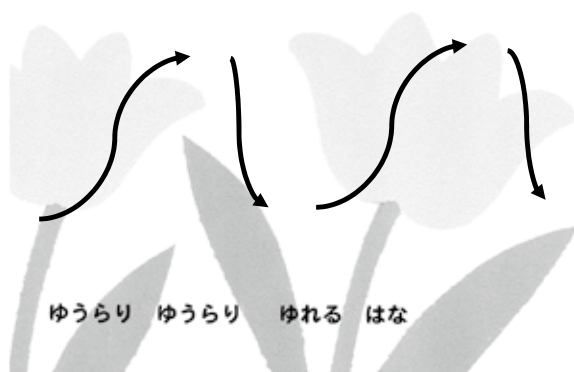
この例では、小さな花のまとまりから成り立つ三つの花が描かれている。小さな花を一つの音として考えると、決まった音域の中で「小さい」を描写するスタッカート奏法の音がいくつもランダムに演奏されることによって成り立つ塊を、音域を変化させて三回演奏することにより、この見開きページの花の描写ができることと考える。

譜例15



9) ゆうらり ゆうらり ゆれる はな

図10



それぞれの花を紹介する部分の最後には、「ゆうらり ゆうらり ゆれる はな」と記された二つの大きな花が描かれている。チューリップを想起させる花の形は手のひらにも似ていることから、「大きさ」を描写するためにも手のひらを使って演奏するクラスター奏法を選択することとする。「ゆうらり ゆうらり」と、悠然と揺れている様子の描写は、一つの方法としてクラスターを言葉の持つ拍合わせて演奏することによりできると考えるが、このほかにも多くの可能性がある。

譜例16



4. まとめ

本研究では、1冊の絵本から絵を図形的な楽譜として見立て、即興演奏のモチーフとする方法の考察を試みた。即興演奏も反復練習と同様に、多くの演奏と省察を経験することにより、

実現したい音楽のイメージが創られ、そのイメージを実際の音として演奏する技術が養われるものではある。初心者にはイメージが実際に音となった結果が好ましいものか、そうでないものかの判断を下すことも困難かと思われるので躊躇することも多々あると思われる。しかし、この様な図形を音と変換する即興演奏には表現活動同様「間違い」はない。演奏者は多くのイメージを音にすることを「楽しむ」という経験を積みながら自分自身の好みや、子どもの感性に語り掛けることができる表現方法を見つけることができる。

演奏者がどう感じ、どう表現するのか、聴衆にどう伝わるのか、これらの要因はその瞬間によっても異なり、その場の雰囲気や環境によっても大きく左右されるものである。保育の現場が毎日・毎瞬間異なる様に、このような即興演奏の方法と結果も毎回異なって当然である。保育者の負担にならない様々な即興演奏の方法が積極的に取り入れられることで、子どもの豊かな感性と想像力が生まれ、創造性を培う土壌となることができると考える。

参考文献

- いしげまりこ ぶん わきさかかつじ え
『どのはな いちばん すきな はな』福音館書店、2012・2017

Extrakt

In der Ausbildung zum/zur Erzieher/In und/oder zum/zur Kindergärtner/In in Japan gehört das Klavierspielen als Selbstverständlichkeit. Jedoch fühlen sich nicht alle, die diese Berufe ausüben, sicher im Klavierspiel. Das führt dazu, dass die Verwendung des Tasteninstrumentes im Alltagsleben von Kindergärten vermieden werden könnte, was heisst, dass die Kinder bei solchen Erziehern immer weniger in Kontakt mit Musik kommen. Allerdings ist es ein ganz wichtiger Faktor in der Kindererziehung, dass die Kinder auf natürliche Weise mit Klängen und Tönen in Berührung kommen. Durch Erfahrungen mit "unsichtbaren" und "untastbaren" unorganisierten Klängen oder organisierter Musik entwickelt sich vielfältige Fantasie im Kinde. Und solche Fantasie ist wichtig, um Kreativität zu fördern und vielfältige Ausdrucksmöglichkeiten im Kinde zu erwecken.

Auf Anregungen aus der Praxis nach Möglichkeiten zu forschen, "Musizieren auf dem Klavier ohne zu üben im Kindergartenalltag" sowie "Förderung frühkindlicher Ausdrucks- und Fantasiefähigkeit" schlägt Verfasserin in der vorliegenden Arbeit vor, Bilder aus Kinderbüchern als grafische Vorlage zu nutzen und nur mit den schwarzen Tasten des Klaviers frei zu improvisieren. Anhand einiger Beispiele soll es vorgestellt werden, wie die Bilder zu grafischen Improvisationsvorlagen umgewandelt werden könnten.

- 1 Erhard Karkoschka, Das Schriftbild der neuen Musik, Moeck, Celle, 1966
- 2 "Als Gegenpol zu möglichst präzisen Vorschriften will die musikalische Graphik anregen, ohne festzulegen."

